



政党内閣制の形成と挫折：第一次大戦後の政治改革 と明治立憲制の再編：1918-32年

村井，良太

(Degree)

博士（政治学）

(Date of Degree)

2002-03-31

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲2505

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1002505>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 1 2 】

氏 名・(本 籍) 村井 良太 (香川県)

博士の専攻分野の名称 博 士 (政治学)

学 位 記 番 号 博い第 1 4 号

学位授与の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当

学位授与の 日 付 平成 1 4 年 3 月 3 1 日

【学位論文題目】

政党内閣制の形成と挫折

—第一次世界大戦後の政治改革と明治立憲制の再編

: 1 9 1 8 - 3 2 -

審 査 委 員

主査 教授 五百旗頭 眞

教授 久米 郁男 助教授 簗原 俊洋

論文内容の要旨

本論文は、1918年の原敬内閣の誕生から1932年の犬養毅内閣の崩壊に至るまでの政党内閣制の形成・展開・挫折を、歴史実証的手法と政治学的分析の双方を用いつつ解明した画期的な力作である。

本論文は、三部・七章から構成されているが、それぞれの内容は概要次の通りである。

序論においては、近現代政治史の研究状況の整理・分析と本論文の意図が語られている。すなわち、戦後日本の第一世代の研究者が、戦争への悔恨と批判をこめて「ファシズム研究」に向うなかで、ファシズムをもたらした弱きものとしての「大正デモクラシー」が想起された。ところが、ほどなく「大正デモクラシー」は戦後民主主義のさきがけと肯定的に評価されるようになり、研究関心も民衆運動から政党政治を含む体制分析へと展開した。1960年代以降の第二世代は、多くの資料公開に恵まれて、多様な政治過程論的研究を産出しているとして主要な先行研究を紹介している。本論文もその流れの中で、政治史的関心と政治理論的関心にまたがる的課題に取り組もうとすることを語っている。

第一部「第一次大戦後の日本政治の選択肢」は、未曾有の総力戦が社会の大衆化・民主化の津波を伴う状況にあって、日本政治がどのように方向を見出していったかを、二つの章に分けて論じている。

第一章は、原敬内閣の二面的な歴史的立場づけを行う。すなわち、原は「藩閥・官僚」と呼び慣わされた非選出勢力をこなしつつ、ついに本格的な政党内閣を樹立したが、彼は「情意投合」と呼ばれた選出・非選出エリート間の政権の授受・交代を考えたのであって、政党間の政権交代（憲政の常道）を望まなかった。言い換えれば、加藤高明の率いる野党第一党・憲政会に政権を与えるべきではないと考えていた。では、外される憲政会は、どう対処したか。憲政会は、大隈重信内閣期に加藤外相が「対華21ヶ条要求」を行ったことで信用を大きく失墜したのみならず、若槻礼次郎、浜口雄幸ら官僚出身の総裁派に対抗する、民衆主義的改革派にして対外硬の立場をとる旧国民党系をはじめ雑多な政治家集団をかかえて、政党としての統合性も期しがたい実状であった。ところが、野に下った大戦後半期に、憲政会は、内に「憲政の常道」、外に英米的な国際的理念の支持、あわせて「デモクラシー」でくくる路線をもって「党質改善」を遂げる。この憲政会の党改革は、本論文全体にとって重要な伏線をなす。

第二章は、原暗殺後の政治的混沌と、戦後に向けての様々な政治構想が競合した状況进行分析する。多数党による政党内閣持続の試みであった高橋是清政友会内閣は挫折するが、それは憲政会の機会を意味せず、むしろ三つの非政党内閣を生み出した。西園寺を含む元老たちは、まだ憲政会を信用せず、政党内閣主義に帰依してもいない。

権威主義的政権への逆流は、かえって「下からの変革運動」を引き起こし、それをパネに1924年から1927年にかけて「政党内閣制」が樹立されるに至る。三つの章からなる第二部「政党内閣制の成立」は、その局面の分析である。

第三章は、清浦圭吾内閣に対して第二次憲政擁護運動が巻き起こり、加藤高明の護憲三派内閣が誕生する。それは、西園寺の意向によってではなく、その政治指導を下からの運動が乗り越える形で実現をみた。これが政党内閣制成立の第一の契機である。

第四章は、幣原喜重郎を外相にすえ国際的信用を回復するとともに、政治的統合力を実証した第一次加藤内閣に、元老西園寺が信頼しうる統治政党を発見し、ためらいなく第二次加藤内閣を選定するという政党内閣制成立の第二の契機を論ずる。西園寺は複数の利用可能な政党を手にして、年来の希望であったイギリス型政党政治の可能性を思い始めることになる。

第五章は、1927年に第一次若槻内閣が政治的混沌の中で崩壊した際、非政党内閣の下で第一回普通選挙を実施すべしとの主張がなされた。西園寺はこれを斥け、政友会総裁の田中義一に大命降下せしめた。「上からの憲政ヴィジョン」をもつての西園寺の政治指導が政党内閣制を成立させた瞬間と、本論文は位置づける。最後の元老は、この時点で「脱個人化」により政変の場合、自動的に有力反対政党が後を継ぐべきものと扱うに至った。

第三部「政党内閣制の展開―興廃の二重過程」は、政党内閣制が定着したかに見えながら、あえなく挫折する1932年までのプロセスを二つの章によって論じている。

第六章において、田中内閣、浜口内閣を通じて、政党内閣制が国民に浸透し、二大政党制が安定したかに見えながら、他面で張作霖爆殺事件やロンドン海軍軍縮会議をめぐって政党政治の無責任や機能不全を露呈するという逆説的状況の進行を描く。

第七章では、満州事変という非常時を迎えて政治的潮流は反転し、第二次若槻内閣から犬養内閣を経て、様々な国家像とからめて政党内閣以外の選択肢が語られるようになり、西園寺も牧野富子中官僚の手に委ねる形で斎藤実の中間内閣を了承する局面を論じている。

大部の研究によって、幾度もの逆流をはねかえしつつ政党政治が築かれ、「制度」にまで高められたことを教えられた後、その崩壊が、社会潮流の反転の中であくも容易であることを告げられて、読者はおののきをもって何故と問わずにはおれないであろう。

論文審査の結果

明治立憲制は、両院の帝国議會を設け、民選議員をもって下院（衆議院）を構成した。しかし、そのことは政党内閣制を必然化するものではなかった。明治体制は、文武諸機関の多元的連合体であり、衆議院は其中で権限の限られた一機関であつたに過ぎない。首相の選定は、衆議院の意思ではなく、元老の合意にもとづく大命降下によつた。

にもかかわらず、民選議會と政党を中軸とする政治は、「憲政擁護」や「憲政常道」の名において次第に抑えがたい潮流となり、第一次大戦末期に原敬を首班とする政友会内閣が生まれた。その後、1924 年から 1932 年まで 8 年にわたり、〈憲政会—民政党〉と〈政友会〉を主要二政党として、その党首ばかりが 7 回続けて政権を担う時代を迎えた。戦前日本における政党政治の最盛期である。

本論文は、1918 年に誕生した原内閣から、1932 年に 5.15 事件によって葬られた犬養内閣に至る、政党内閣制の形成から崩壊までを、系統だった分析視角をもって論じた A4 タイプ 500 ページもの力ある大作である。十数年にわたる政党内閣の歴史を、これほどの密度と鮮明さをもって論じきったことが、まず第一に高く評価される。

第二に、本論文は、政党内閣期の政治史研究であるだけでなく、政治学的な関心をもつての政党政治研究でもある。1924 年から 1932 年の時期が、たまたま政党内閣が連続した「政党内閣期」であつたに留まらず、「政党内閣制」が成立していたとの観点を展開している。すなわち、議會を基礎とする政党の党首のみが首相となり、それ以外の選挙が排除される政権交代システムが、この時期に存在していたと論ずるのである。戦前の政党政治に、政治システムとしての分析を加え、性格づけを行ったことは、同様な試みが多くないだけに意義深い。

第三に、本論文のいま一つの意義は、憲政会—民政党を統治能力ある責任政党として浮かび上がらせたことである。従来、三谷太郎教授らの優れた研究によって、原が政友会改革に成功し、同党は唯一の統治政党に成長して、日露戦争後の政治的中軸となつたことが知られてきた。しかし 1920 年代の日本政治にあつては、政友会よりも憲政会—民政党が、むしろ中心的役割を果たす。本論文は、それが政友会分裂の反射的利益といった偶然性によるのではなく、憲政会自体の内政外交にわたる責任政党への脱皮が達成された結果であると論じている。本研究が、これまでの研究において支配的であつた政友会中心史観を修正・補完したことは高く評価されるであろう。

第四に、本論文のおそらく最大の特徴は、二つのレベル すなわち、政権の担い手たる政党政治のレベルと、首相選定権を持つ元老・宮中のレベル の分析を並行させ、その相互作用において政党内閣制を論じたことであろう。いわば二階建の分析が展開されているのであるが、その関係は、たとえば次のようである。

元老西園寺は、第一次加藤高明内閣の成立に際しては憲政会の資格・能力に懐疑的であり、「下からの変革運動」に突き動かされた政党政治レベルの帰趨を不承不承に認めたに過ぎなかった。ところが、西園寺は幣原喜重郎を外相にすえた加藤内閣の責任ある国際政策を観るに及んで評価を改め、第二次内閣に際しては積極的に奏薦した。憲政会は元老によって当事者能力を認められたのである。さらに一部に存在した非政党内閣による総選挙論を斥けて、西園寺が田中義一の政友会内閣を組織せしめたことは、「政党内閣制」が不可逆的なものと広く認識される結果をもたらし、政界と明治体制全般がそれを前提に再編されるに至つたとする。このように両レベルの相互作用において、政党内閣制の展開が跡づけられており、それは幾多の新たな歴史的・構造的関連の提示を含んでいる。

第五に、もう一つこれに関連して注目される点は、西園寺像の探求もしくは再定義を試みていることである。西園寺の政治指導については、政党内閣主義を強く信奉していたとの見方と、政党内閣であれ中間内閣であれ政治的安定をもたらす政権であればよかったとする見方が存在する。本論文は、西園寺が「将来は英国流に多数党政権を取ることとなさざるや」という言葉に示される長期的志向性を堅持しつつも、その条件を政党を初めとする現実の政治状況が満たすか否かを見定めようとしていたと解し、様々な局面における西園寺の言動に系統立った説明を加えている。最後の元老が、政党内閣制の自動化と天皇の政治的機能の極小化を、牧野伸顕ら宮中官僚と意見を違えつつ追求したと、『牧野伸顕日記』など新資料の検討に基づいて論じているのは、西園寺像再論の可能性を示すものとして興味深い。

この論文にあえて問題点を指摘するとすれば、1932 年の政党内閣のあつけない崩壊についての説明であろうか。政党中心政治が深化を遂げつつも混乱を来たすに至つたとの分析は、それなりに興味深いものである。けれども、それは本論文が設定した枠組の中での説明であろう。本論文は二階建であると先に述べたが、危機の中での政策対処の失敗が社会に巻き起こす動揺の深さなど、社会レベルを組み込んで三階建にしなければ説明仕切れない問題も生じているとも言えよう。

とはいえ、それはこの大論文をさらに長大にして、すべての問題に答えよと要求するに等しいであろう。総体的にみて、本論文は稀な水準の高さをもって学界の先端的研究に新たな貢献をなした画期的な成果と認められる。

以上の理由から、審査委員は本論文の著者・村井良太氏が博士（政治学）の学位に適格であると認定する。

平成 14 年 3 月 8 日

審査委員 主査 教授 五百旗頭 眞
教授 久米 郁男
助教授 簗原 俊洋